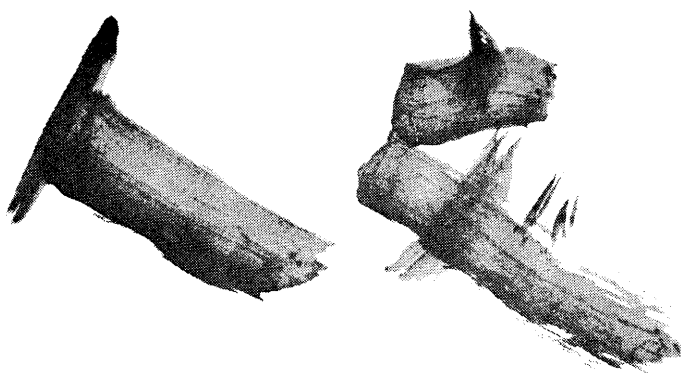




第三八号



1992

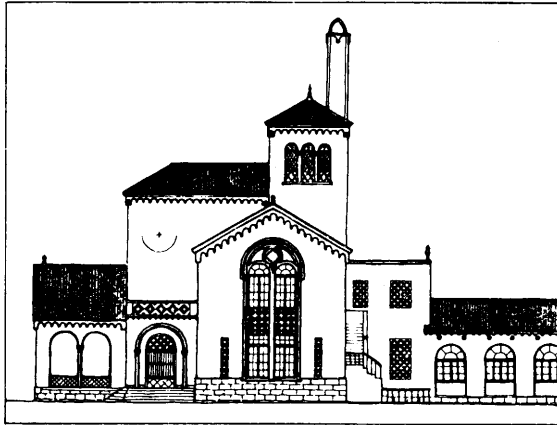
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第三八号

1991年1月——1991年12月

も く じ



随想

く に ユルギス・エリソナス

還流する過去 谷 泰

バイエル舊蔵書のこと 高田 時雄

講演

夏期講座—神話—

儀礼と神話—古代インドの祭式世界から(井狩)／中国神話の諸様相—女媧を中心にして—(小南)／出自神話でみるドイツ史(佐々木)／十八世紀日本の神話論争—本居宣長と上田秋成—(飛鳥井)／統一テーマとシンポジウム(大浦)

開所記念講演

絵の評価—中国画論史の一面面—(河野)／植民地下朝鮮民族解放運動の空間(水野)／シュメール粘土板文書にみえる耕地の形状(前川)

彙報

おくりもの(23)・訃報(23)・人のうごき(23)・外国人研究員(25)・招へい外国人学者(25)・外国人研修員(26)・外国人研究生(26)・文部省内地研究員(27)・東洋学文献センター講習会(27)・講演会(27)・お客さま(28)

共同研究の話題

アジア主義をめぐって 古屋 哲夫

石窟資料さまざま 曾布川 寛

『儀礼的暴力の研究』班 田中 雅一

旅

台湾インテレクチュアルズと日本語 山本 有造

ウィーン雑感 船山 徹

ロンドンの「クライヴ・ジェイムズ・ショウ」 光永 雅明

書いたもの一覽

おもしろく読んだ本

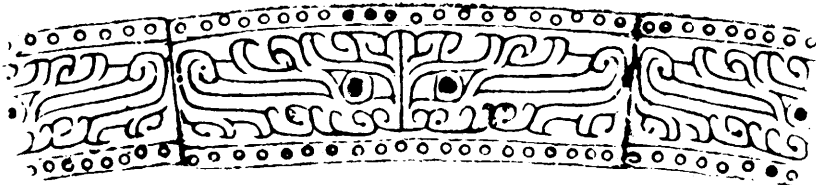
く に

ユルギス・エリソナス

リトアニアと言う国の名が初めて日本の文献に現れたのは、管見によれば、享保九年（一七二四年）にその定稿が出来たとされる新井白石の『西洋紀聞』の次の文章である。

ポローニヤの君死してブランデブルコ、リトアニア、ゼルマニア（中略）の三國、其國をあらそひ、ポローニヤの兵、戦死するもの七千人、ゼルマニアの兵もまた戦死するもの二千に及びき、此戦ひの事は、其説詳ならずリトアニアもまたいまだつまびらかならず

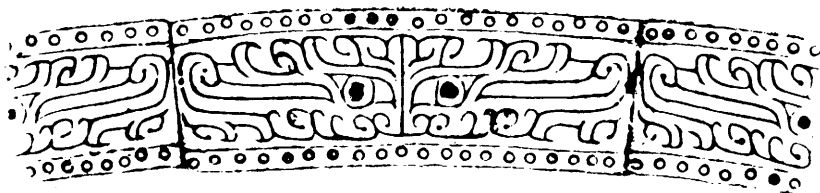
白石がその国に関して「つまびらかならず」と言つたのは何ら驚くべきことでもない。十四世紀に一大帝国を造つて、權力をバルト海から黒海まで伸ばしたリトアニア大公国は、長期的には両隣の列強、西のドイツ騎士団と東に抬頭したモスクワに単独で抵抗出来ないと知り、ポーランドと連合を結んで、運命を共にした。ほぼ二世紀かかったこの二国の合併のプロセスは、一五六九年のルブリンの合同によって一応決着した。ポーランドと一つの「共同体」を構成したリトアニアは、形式上は独立を保ちながらも、實際は徐々にその政治的・文化的アイデ



ンティターを失い、ポーランドの一部分と看做されるようになった。そして、十八世紀末に極端な政治衰弱状態に落ちたポーランドが隣国に分割されるに至り、リトアニアも宿敵モスクワ大公国の継承者たるロシア帝国の餌食になって、その国名さえ地図から消えた。白石の死後の七〇年目に当たる一七九五年（寛政七年）のことである。

その後はリトアニアが一二〇年間も続く帝政ロシアによる植民地下の長い冬を忍び、第一次世界大戦の重荷に耐え、一九一八年に独立国として蘇生した。しかしながら、自由は短かった。一九三九・四〇年に再び隣国――西のドイツ第三帝国と東に抬頭したスターリンのモスクワに分割され、第二次世界大戦の殺戮にもかかわらず生き残ったものの、今度は共產制ロシアといわゆる「ソ連」のより残酷な植民地下の暗闇に喘えがざるを得なかった。かつてアダム・ミツキエヴィチに「リトアニア、吾が祖国よ、そなたは健康の如し、失いて後のみそなたの貴さを知るべし」と歌われたくには、私がこの人文科学研究所で研究をした一年の間に、また独立を成し遂げた。一生忘れられない年である。

*ユルギス・エリソナス氏は、リトアニア出身であり、これまでアメリカ流のジョージ・エリソンを名乗っていたが、独立を機にリトアニア名に名を戻された。（編集子）

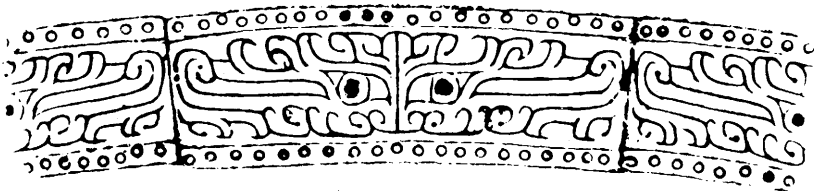


還流する過去

谷 泰

この一、二年の出来事は、新聞連載の世界規模の大河小説を日々読まされているようで、考えさせられる種に事欠かなかった。過去が問い直され、清算が求められている。こんな総括もおこった事態を語るのに、ある真実を含むものの、過去が簡単に清算できないことは、歴史家のよく知るところだ。むしろ、当然のことながら改めて考えさせられたことのひとつは、ある現在の行為決定が、各々にある深度をもった過去の前提的所与と連動し意味をもつ。そしてたんに「歴史」として読まれる「過去」でなく、生々しい「過去」が、現実の出来事と連動しつつ還流して、われわれを縛るということだった。

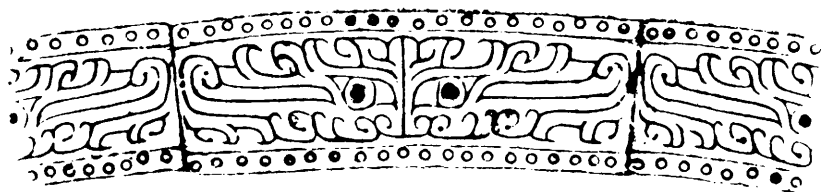
ソ連邦に併合されていたリトアニアやエストニアの独立要求の承認は、ヒットラーとスターリンという、いまや否定的価値を与えられた人物の合意で生じた結果を清算することで、それは認め易い。しかしグルジアの独立を認めることは、ソ連邦の理念に従って、連邦形成時にいち早くそれへの参画をした共和国の離脱を認めることである。つまり時間的にはソ連邦成立時



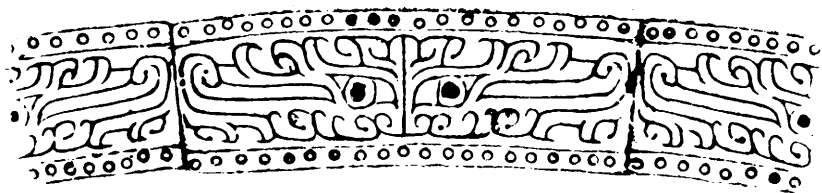
点に溯つて、ソ連邦という歴史的形成物の前提の自己否定を容認することを意味する。しかもそんな論理的含意をもちうる独立承認行為は、グルジアよりもあとに連邦参加をきめた共和国の独立志向に対する歯止めを失うという波及効果を招き、ソ連邦解体に大きなはずみをつけることになる。もちろんソ連邦はいまや解体しているが、当時の指導者たちは、こういう点で、グルジアの独立の動きに、強い危懼を抱いたらしい。

じつは旧体制の一員という地位を桎梏とみる点で、グルジアの人々は、リトアニアの人びととさして差はない。だのに清算し、読み直される過去の重みに差があり、同じ行為が別の意味をもつてみられる。独立を求める人びとに、こんな過去の因縁、また当時の理念に照した意味づけはほとんど意味をもたない。いわば過去の記憶にもとづく思いがけない因果である。ただ、この歴史的延長としての意味連続体に参照して引き出される今の行為への意味づけが、さまざまな深度でわれわれを縛ろうとすることも否定できない。

記憶があるから、今を生きようとするわれわれの志向とは別の深みから「過去」が還流してくる。しかもたんなる記憶としてでなく、時間的深度をもつ意味連続体として構築された「過去」の因果が、現在のあり方に意味を与えていると思うからこそ、その束縛をうける。しかもそれらは、現在のわれわれの修正の手の及ばない所与として、過去の地点にある。そんな今を



縛る過去記憶なら消去すればよい。そう思うこともある。しかし記憶に支えられ、意味を附与された「過去」が、今の知覚の参照枠になることも事実である。こういう還流する「過去」のいずれと、どのようにつきあうか。こういう問いが強く意識される時が、制度の歴史にも、個人の歴史にもある。そしてこの問題は、歴史家であるか否かを問わず、時間的延長をもつ特定の意味空間のトンネルのさまざまの地点に、支持糸をかけ、クモの巣のような棲み場に住んでいる、われわれの存在様態に由来する。新たな未来の地点に糸を懸けようとする、既存の糸を切らなくてはならない。しかしある糸を切ると、緊張した糸の巢は、自重で次々に切れて、下手をすると落下するかもしれない。時間的要素をもふくんだ、手順の問題がそこにあるかにみえる。

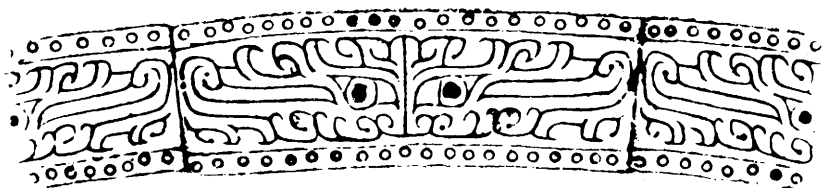


バイエル舊藏書のこと

高 田 時 雄

バイエル (Theophilus Gottlieb Bayer 一六九四—一七三八) はプロイセンのレギオモンテ (Regiomonte) すなわちケーニヒスベルグ (Königsberg) の生まれで、草創間もないペテルブルクのアカデミーでは古典学の教授であった。この人物が我々の注意を惹くのは、彼がヨーロッパで出版された最初の中国語文法たる *Meseum Sinicum* 二卷 (一七三〇 St. Petersburg) の著者だからである。そのバイエルの残した資料 (Bayeriana) が今グラスゴウのハンター文庫 (Hunterian Collection) に残っている。

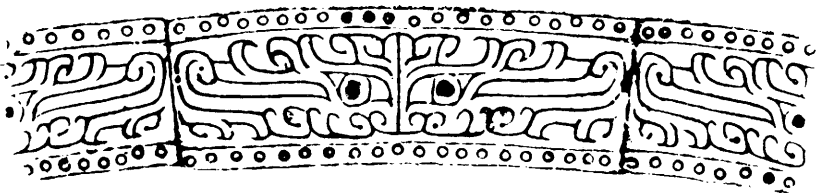
ハンター文庫とは十八世紀イギリスの医師 William Hunter (一七一八—一八三三) の個人文庫であるが、その死後ややあつて一八七〇年にグラスゴウ大学に寄贈された。この文庫は数百種の中世やルネッサンス期の写本をはじめとして、刊本では五百三十四冊のインキュナビュラや二千三百冊以上の十六世紀刊本など、ほぼ一万冊に及ぶ貴重図書コレクションとして有名な存在となっているが、バイエル資料もまたその一部を成している。



昨春のヨーロッパ滞在中、機会があつてそれらを閲覧することができた。

当初目当てにしたのは、バイエルが書き残したノート類や書簡の類、それにバイエルが在北京の宣教師との通信によつて入手したバランナン (Dominique Parrenin) の漢羅辞書などであつたが、行つてみるとバイエルが所蔵していた漢籍もコレクションの中に含まれていることが判つた。総数およそ八十点で、決して多い数量とは言えないが、当時はパリの王立図書館の漢籍ですらその所蔵が数百の単位であつたから、まんだら少ないということもない。加えてバイエルという一学者の個人蔵として見るとき、この人物の興味の範囲も知られてなかなか面白いのである。

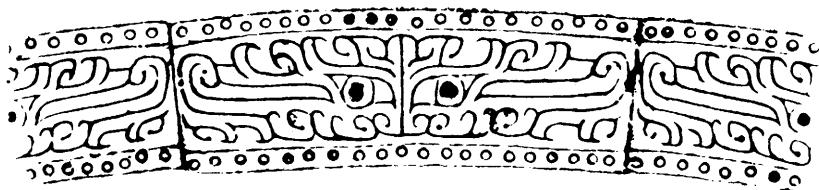
しかし今は彼の中国語学習に関係するものに付いてだけ言えば、まず『字彙』が目を引いた。バイエルには「中国の辞書『字彙』について」*De lexico Sinico Cû gvêy* という一文 (アカデミーの紀要 *Commentarii* 第六冊、一七三八) もあり、彼がこの字書を使つていたことは分かっている。だから、雍正二年新鐫、古吳煥文堂梓行、聯璧字彙、と封面にいうこの本がまさしくバイエルの手沢本であることは間違いない。題僉の「字彙」の文字の横に *cû gvêy*, *Lexicon Sinicum* とペン書きで注記し、同じく「煥文堂」の横には *Nomen officina*, *ex qua haec editio producta* といふものも見慣れたバイエルの文字で



ある。

ところがコレクション中には『康熙字典』も存在する。『字典』は康熙五十五年（一七一六）に出来上がったが、当初は重臣に賞賜されるばかりで通行すること広からず、のち官府や坊間の翻刻が多くなるに及んで、ようやく盛行を見たという。わが国でも安永七年（一七七八）に和刻が出現するまではもっぱら『字彙』の時代であった。バイエルは北京の宣教師との間に通信があったから、逸早く『字典』を入手していたとしてもおかしくはない。しかし上記のように彼はその最晩年においてもまだ『字彙』の紹介をしているほどで、『字典』を使った形跡が全くない。だから『康熙字典』がコレクション中にあることには奇異な感じがした。この一群の漢籍には或いはバイエルの所蔵以外のものが相当数混入しているのではないか。それには図書館の司書ウエストン氏がこれらの漢籍中からバイエル旧蔵のものとしてうでないものを選別する作業をしていると聞いたことも影響していた。

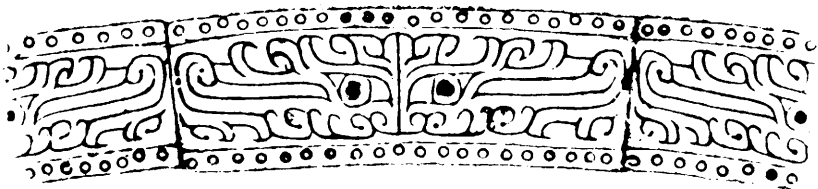
一層その疑念を強くしたのは、ある一冊に挟み込まれていた紙片である。それはアラビア数字で1から7までの番号をつけた書物のリストであり、実は『康熙字典』の名もその中にある。その七種の書物をしらべてみると、他の書物のようにバイエルの書き込みがない。アラビア数字で番号を振ってあることからすれば、ヨーロッパの宣教師が作った書物送付リストであるこ



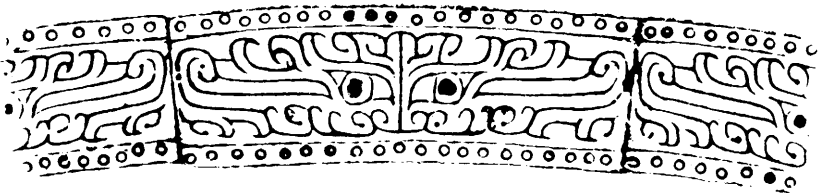
とは間違いない。どうということだろう。これらの書物はバイエルとは関係がなく、別の人物に送られたもので、それが後に他の経路を辿ってハンター文庫に収まったものであろうか。或いはまたバイエルが利用するに及ばないような時期、つまりその死の直前ないしは死後にバイエルのもとに届けられたものであろうか。

結論が出せないまま、その疑問もほとんど忘れかけていたころ、一九八六年に刊行されたルンドベック氏のバイエル伝を読んで、バイエル資料の中にやはりこの疑問を解く手紙の存在することを知った。それは北京の宣教師からバイエルに宛てた一七三七年五月付けの二通で、その中にバイエルに宛てて書物を送ったという記述があり、付載のリストには『康熙字典』も含まれているという。バイエルがこれを受け取ったのは翌年の一月三十一日で、彼の死は二月十日であるから、『字典』の利用は言うにおよばず、受け取った書物もほとんど手付かずであったのは当然といえる。これでようやく疑念は晴れた。

ところでバイエルよりやや先輩にあたるフランスの宣教師ブレメール (Joseph Prémare 一六六六—一七二六) が書いた文法 *Notitia Linguae Sinicae* には、重要な字書としてすでに『康熙字典』を挙げているが、『字彙』の方はない。中国在住の宣教師の間ではもはや『康熙字典』が普通になりはじめていた時期である。バイエルは巨大な漢羅辞典の編纂に従事してい



たから、彼が今少し長命であつたなら、必ずや北京から送られたこの『康熙字典』を十分に利用していたに違ひないと思われる。しかしほこりをかぶつたこの字書は、バイエルのみならず、それ以後今日までだれも利用した形跡がなかった。



講演



夏期講座（一九九一年度）

七月十二日～十三日
於 本館会議室

統一テーマ 神話

儀礼と神話

——古代インドの祭式世界から——

井 狩 彌 介

神話の問題を考える手掛かりとして、インド最古の文献群ヴェーダを取り上げ、そのなかでも古層の、シユラウタ祭式文献を例にとって話を進めた。ヴェーダ文献から知られる祭式観にはふたつのタイプが並存している。ひとつは、祭式に神々を賓客として迎え、これをもてなす賓客歓待儀礼であり、もうひとつは祭場と宇宙、あるいは祭場・宇宙・人間といった異なった

次元の存在のあいだに類比対応ないし象徴的対応を認め、この異次元の要素のあいだの象徴的同置を前提として儀礼効果を求める呪術儀礼である。ヴェーダ祭式においては後者の呪術儀礼のタイプに次第に大きな比重が置かれるようになっていく。

ヴェーダにおいては、いわゆる「神話」に相当する術語は存在しないが、「神話」をひとまず、超自然的な存在が主な登場人物として活躍する物語と漠然と考えておくと、ヴェーダ文献にみられる「神話」要素は呪術儀礼の思考による祭式規定の根拠付けのさまざまなタイプの文章のひとつとして登場する。超自然存在を主題として展開する物語は、特定の祭式行為（行為と祭文）がなぜ演じられるのかという理由づけの機能を持つものとして位置づけられる。「神話」は祭式要素の根拠づけという役割を担わされているのである。

講演ではヴェーダ文献に登場するさまざまな「神話」のうち、日食神話として知られる「スヴァールバーヌと太陽」を取り上げて、このような「神話」テキストの文体、構造と祭式コンテクストとのかかわりについて例示した。ヴェーダ伝承を保持する各祭式学派のテキストを比較分析することにより、物語の提示の仕方において、話しの構造の固定部分（不変部分）と流動部分（可変部分）とが存在することを指摘した。す

なわち、「神話」のさまざまな祭式への解釈・説明の適用のあり方によって、物語の流動部分が変化するのである。言い換えると、「神話」のヴァリアントのあり方は、それが適用される祭式によって条件づけられるということになる。このことを、「日食神話」が登場するヴェーダ祭式のさまざまなパターンを提示しつつ、具体的な祭式行為と神話要素との関係が古代のヴェーダ祭式家にどのように捉えられていたかを説明した。

ヴェーダにおける「神話」の問題を、祭式伝承というコンテクストのなかで物語テキストがどのように変容しうるかという視点で扱ってみたが、具体的な祭式コンテクストのなかでの「神話」の変容で指摘した諸側面は、神話一般の生成と変容を扱う場合にも示唆するところが少なくないと考えている。



中国神話の諸様相

——女媧を中心にして——

小 南 一 郎

すこし前までは、中国人は現実主義的であるので、中国には元来、神話がなかったのだとする主張がないでもなかった。たしかに、たとえばギリシャ神話や日本神話のような体系性や系譜性を持った神話は、中国では発達しなかった。現在、我々が知り得る中国神話は、大部分が断片的なものであり、多くの神々の名は見えても、相互の関係は希薄な場合が多い。しかし、神々の系譜関係が古代王権を権威づけるための意図的な作業の結果に由来する場合が多いように、文献上で強調される諸神話の体系性や系譜性は、“神話時代”以後の付加的な要素である面が強いであろう。そのように考えれば、中国神話の断片性は、むしろ後世的な加工を受けておらず、元来の様相をそのままに伝えたものだということになろう。

中国の神話——ここでは特に女媧の神話を例に取るが——は、単に古い文献に留められているだけではない。古代の書物に見える神の名が、現在の少数民族の神話伝説の中に登場することもまれではない。そうし

た神話伝説は、単なる物語りというのではなく、特定の行事や宗教儀礼と結び付けて語られるものが多い。

同様に漢族の年中行事の中にも女媧神話の残存を見ることができ、さらにまた、漢代の画像石以来、神話的な神々の姿を描いた画像資料が多く遺されているが、それらは特に死者儀礼と密接な関係を有するものであった。このように、下った時代にあつても、神話は儀礼と不可分なものであつたことが知られるのである。

おそらく、もっぱら文献だけを材料にして神話を分析するならば、神話と儀礼との密接な関係は、十分には認識されないであろう。神話は、「原初の行為」の記述を本質としており、その「原初の行為」は、儀式の中で再現されるものであつた。その儀式の場は、その参加者を含めて、そのまま神話的な原初の時と空間とになつたのである。そうした場において、宇宙が創造され、また我々の人間としての存在が規定された。神話は、人間の、この宇宙内の存在としての意味を、「原初の行為」によって、元来は規定づけ、時代を下つては、説明づけようとするものであつたと言えるのである。

出自神話でみるドイツ史

佐々木 博 光

出自神話とはなにか。ある集団が、血縁関係の存在を証明できないにもかかわらず、共通の祖先や出自をもつと信じている場合、これを出自神話とよぶ。では、このような架空の祖先に対する信仰は、それを信じている集団にとつてどのような意味をもち、またどのような影響を及ぼすものなのであろうか。本講座では、この問題を筆者が研究対象とするドイツを例にとつて考察してみた。その際、ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーの「種族的な」集団に関する定義を導きの糸とした。すなわち、ヴェーバーによれば、血縁の共通性を主観的に信じている人間集団であつて、しかもそれが氏族でない場合に、それを「種族的な」集団とよぶのである。では、出自神話を媒介として観察するとき、ドイツという国は一体どのような様相を呈するのであろうか。

次に、本題の内容を簡単に紹介する。中世のドイツには出自神話は存在しない。そこで、これまでドイツの中世史家がドイツ史の紀元と考へてきた時期を、筆

者は「種族なき王国」と一括した。この「種族なき王国」に大きな衝撃が走るのは近世である。タキトゥスの『ゲルマニア』の発見にともなって、ドイツの人文主義者たちは古代のゲルマン人を自らの祖先と考えるようになったのである。さらに、その後の学問研究はこの出自神話に様々なイデオロギーを付与した（例えば、純血理念等）。最後に、この退行的・過去回帰的な性質の濃厚なゲルマン・イデオロギーが近・現代のドイツに及ぼした破滅的な影響を論じたのち、それが必ずしも現在の歴史学において払拭されてはいない点を指摘し、結びとした。



十八世紀日本の神話論争

——本居宣長と上田秋成——

飛鳥井 雅 道

十八世紀後半、江戸社会が成熟期を迎えるころ、文人たちのあいだには、いつせいに神話研究の動きが強まった。古典研究と、自らの出発点を探究しようとする歴史意識が、結びついたのである。とくに注意されるべきなのは、この動きが、民間学者の自発的なものとして成立した点である。

いうまでもなく、最大の成果は、本居宣長の『古事記伝』（一七九八年・寛政一〇完成、刊行は一七九〇—一八二二）だが、この本が書かれている過程で、いくつものほげしい論争がくりかえされた。歴史と神話の関係、古典と現実の関係などが、深く広く問われ、厳しい論難が投げかけられた。

市川匡麻呂、藤原貞幹などから始まったこの論議が、本居宣長、上田秋成の当時最高の学者の論争となったとき、それぞれの学問の性格がその本質において現されただけでなく、日本神話の性格そのものの本質も、その姿を現したといつてよい。

一七八六年から翌年にかけての上田秋成・本居宣長

論争は、数回の手紙の交換によるものだが、たがいに遠慮なく自分の学問観・古典論・神話論を展開した。

本居宣長は若き日に『源氏物語』の世界に没頭したときと同じく、『古事記』の世界に没入し、そこに書かれていることを正確に捕らえることで、古代そのもの、またそこに生きた神々の世界を生きたことができる、と信じていた。『古事記』の「事」と「言」は同一であり、疑いをはさむことは全く必要のないことだと考えた。一見、非近代的にみえるこの本居宣長の態度は、しかし、『古事記』の内的論理構造を照らし出すうえで、鋭く力強い方法だったのである。

一方、上田秋成は懷疑論の立場をとった。立場によってもその見方が変わることを、秋成は知っていた。宣長の信念を秋成は傲慢と受けとる。神話に異伝がある以上、それは相対的にとらえるべきとする彼は、神話の世界から歴史へと信頼の対象を移してゆく。

本居宣長・上田秋成の対立は、十八世紀後半、すなわち近代の開幕の直前において、学問的・批判的精神のあり方を問いかける重要なものであった。日本精神史にとって、宣長のありかたのほうが結果として生産的だったことが、のち二十世紀まで大きな問題を投げかけるであろう。

統一テーマとシンポジウム

大浦 康 介

九一年度から夏期講座が大きく様変わりしたが、改革の最も重要な点は、講演者の顔ぶれを決めるに先立って統一テーマを設定するということである。来聴者本位で考えるならば当然のことではある。改年初年度のテーマは〈神話〉だった。統一テーマは、テーマそのものが適当かどうかという議論に加えて、所内での講演引受の可能性（このテーマなら誰それが話をしてくれるだろうという見通し）をも考慮に入れて選ばれるが、〈神話〉は幾つか出された提案の中でもその両面において最適であると判断された。内容上の分類を敢えてすれば、選ばれるべき統一テーマは普遍的なものと時宜になかったものとの二種類に大別されるだろうが、〈神話〉は前者の最たるものであると言える（もちろん、神話についてあらためて考えることの今日的意味といった観点が全く不在であったわけではないが）。講演者について言えば、当初の希望どおり、飛鳥井、小南、井狩、佐々木（博）の四氏の快諾を得ることができた。

シンポジウムも今回が初めての試みだった。シンポジウムは必ずしも毎回ではなく適宜必要に応じて開く（形式もそのつど決める）ということになっているのだが、今回の場合、テーマと各講演の内容に鑑みてもシンポジウム開催の意義は明らかであるように思われた。佐々木氏の講演を一応別にすれば、今回の講演はいずれも、インド、中国、日本といった一国における神話（あるいは神話解釈）の多少とも歴史的なあり方を論ずるものであり、それらの間の横のつながり、類似や差異の関係を比較文化論的に考える上でシンポジウムという講演者同志の対話の場を設けることは不可欠だと思われたのである。さらに、バランスをとるためにもギリシア神話に精通した方の発言が是非欲しいということで文学部から西洋古典の中務哲郎氏の出席が、また人類学の立場から聖書神話にも詳しい谷泰氏の出席が提案され、両氏ともにこれを快く引受けられた。かくしてシンポジウムは夏期講座二日目の最後を締めくくると催された（大浦が司会を務めた）。シンポジウムは、今述べたように講演者相互の対話の場であると同時に、各講演後の質疑応答では汲み尽せなかった来聴者からの発言を聞く場としても予定された。以下ではシンポジウムでの議論の重要なポイントの一つだけを記したい。

一日目に行われた井狩、小南両氏の講演は、期せずして（？）古代インドと中国に関してかなり類似した神話のあり方を浮彫りにしている。すなわち、完結し体系化された物語を持たず、断片的な資料から構成されるほかない、しかも祭式儀礼や年中行事といったものに密接に結びついた、いわば「未分化」の神話の形態である。この儀礼と不可分である関係は、神話の原初的意味を規定している。つまり超自然的存在との交わりや宇宙創造の場への参加である。このような神話のあり方こそが本来的な神話の姿なのか（神話のテキスト化や体系化は後世がもたらした一種の墮落形態であるのか）。ここに大きな問題が一つ提起されていることは間違いない。中務氏によれば、ギリシア神話とてもまとまった話としてあるのではないが、インドや中国と違ってギリシアでは神話が儀礼と一体化している例があまり見られず、神話は早い時期に文字や美術に結びついて、固定化されずに様々な変形を遂げてきたようである。一方谷氏は、神話と儀礼の結びつきを旧約の場合を例にとつて説明し、神話のテキスト化のプロセスに触れると同時に、「神話」として特定化される以前、文字によつて記される以前の歌や語りの〈力〉というものに注意を促した。つづいて、インドの場合、神話のあり方を規定するものとして特権的な

儀礼集団の存在が大きいという指摘が井狩氏からなされたが、それを受ける形で飛鳥井氏から、日本でも八世紀初頭の『古事記』、『日本書紀』編纂までは儀礼集団によって維持されていたという発言があった。何を神話と呼ぶかについては当然ながら俄にコンセンサスを得ることは出来なかったが（儀礼とは人間が宇宙に働きかけるための手段であり、それに要する説明が神話であるという小南氏の定義は実に明快であるし、神話とは時代を超えて常に立ち現われ、常に再解釈可能なものであるという中務氏の発言も印象深かった）、少なくとも神話的なもののおそらくは原初的なあり方とその発展の諸様相を、文字化あるいはテキスト化という問題にまで踏み込んで、大まかにではあるが相対的な視点を保持しつつ議論し得たように思う。

なにぶん初めてのことで組織側にも至らぬ点が幾つかあった。私の司会の拙さがその第一だが、パネリストのマイクや椅子の高さなど、技術的な問題も挙げられる。次年度以降のための反省材料にしたいと思う。

開所記念講演（一九九一年度）

十一月七日
於本館会議室

絵の評価

——中国画論史の一側面——

河野道房

事物の価値評価の難しさというものは、改めて問題にするまでもないくらい自明なことであろう。普遍的真理を探究する学問でさえ、一見主観的评价を極力排除しているようにみえるが、その底には主観的価値評価に基づく問題意識があるはずである。まして芸術にかかわる学は、価値評価の問題を避けて通るわけにはいかない。中国においては、特に絵画の領域では、先人たちはこの問題とどのようにとらえてきたのであろうか。

絵の評価の原初的形態は、東晋前後に興ったと考えられる、画家の比較による優劣の論議にあるといつてよい。しかし、絵そのものの優劣論は、もっとさかのぼる。韓非子や淮南子にみられる、犬馬の絵のほうが鬼神よりも難しい、という有名な論である。これらは画題による表現の難易度を、すなわち画題による評価

というひとつの価値基準を示しており、後世の画題の優劣論の萌芽となる。そして唐、宋では人物画、山水画という順で主題の優劣が規定され（唐朝名画録、画史）、明にはいると逆転して山水、人物という順番になる（考槃餘事、長物志）、という具合に展開する。そして一方、画題の優劣は時代によって逆転するという論（図画見聞誌）が出るにおよび、一主題での時代ごと、朝代ごとの優劣論が盛んになった（弇州山人四部稿、長物志など）。これらは、はじめは細やかな議論がなされていたが、明後期以降は次第に図式化、形骸化していった。

このような主題、画題や時代ごとの優劣評価の論が行われる一方で、画家個人の優劣も六朝から唐代にかけて盛んに議論された。それらは古画品録にはじまる品第法としてあまりにも有名であるが、上品、中品、下品をさらに上中下に分ける九品一律の品等が、中唐の歴代名画記においてすでに力を失っているのは注意すべきであろう。やがて北宋の図画見聞誌に至って、品第法はまったく廃されてしまうのである。では品第にかわる画家評価の尺度は何であろうか。これにはまだはっきりした答えはでないが、流派ごとの評価というものが考えられる。流派の認識の源は、師弟関係としてすでに六朝画論にみられるが、ひとまとまり

のグループとしての認識はなく、それが現れるのは宋代以降ではないかとおもわれる。南宋の洞天清緑集に、李昭道から王詵、趙伯駒にいたる金碧山水の系譜の記述があり、流派概念の萌芽とみてよい。明代にはいると、王世貞、莫是龍、何良俊などが多彩な流派観を示しており、それらを総合的に体系づけた集大成が、董其昌の著名な南北二宗論（画禪室隨筆）なのである。それは絵画史の複雑な流れを理解しやすい図式に還元し、統一的絵画観を提示するという功績があったが、誤解も多く後世の絵画観を大きく束縛することとなった。流派論のひとつの頂点というべきものである。

以上、中国画論史における絵の評価について概観してみたが、すべて評価法の技術的方法論の問題に還元されていることがわかる。つまり価値評価という主観的、直観的問題を、観念論的に解決することはせず、実用的な方法論という次元に引き降ろして論じているのである。ここに中国画論のひとつの顕著な特質をみることができるのである。

植民地下朝鮮民族

解放運動の空間

水野直樹

日本支配下朝鮮の民族解放運動の全体像をとらえようとすると、空間的領域の問題を無視することはできない。国内では弾圧が厳しかったため、運動の中心はいきおい国外に置かれることになった。その運動領域は、中国・ロシア（ソ連）・日本など、東アジアの全域にわたっている。それは、日本の植民地支配による窮乏化などから多数の朝鮮民衆が国外に流出せざるをえなかったこととも深い関連がある。

各地での民族解放運動は当該地域の政治情勢によって大きく左右されざるをえなかった。シベリア戦争、中国の国民革命、「満州事変」、日中全面戦争へと続く一九二〇年代から三〇年代にかけての東アジア情勢の変動の中で、朝鮮民族解放運動の空間も大きく変化した。民族解放運動の側は、状況に応じて運動空間を見い出して行った。

独立運動家の軌跡をたどってみると、彼らの多くが国境を何度も越えて各地を行き来していることがわかる。ニム・ウェールズ、キム・サン共著『アリランの

歌』（岩波文庫）に登場する人物もそうである。例えば、李鏞（ハーグ密使事件の際に自決した李偽の息子）は中国の武官学校に学んだ後、二〇年代には満州・シベリアでのパルチザン活動、中国南方での国民革命に加わり、その後再び満州での武装闘争に加わって日本当局に逮捕され、朝鮮国内に送還された。解放後、南朝鮮で活動した後、北に移り、朝鮮民主主義人民共和国の大臣になるという波乱に満ちた生涯を送った。

一九四五年の解放以後の朝鮮現代史を考えると、朝鮮国内での民族解放運動の展開もきわめて重要なものであるが、それをも含めて朝鮮民族解放運動を東アジアという空間の中に位置づけ、その歴史的展開をとらえることが必要であらう。



シュメール粘土板文書にみえる 耕地の形状

前 川 和 也

シュメール・ウル第三王朝時代(前二一〇〇—二一〇〇)のギルスから出土した耕地測量記録、とりわけ「円形泥章」および大英博物館が所蔵する未刊測量記録を用いて、直営耕地ユニットやひとびとに与えられた耕地の形状、その配列原理などを考えてみた。

約七〇個の「円形泥章」から、一〇八—一二五イク程度の面積を有する直営ユニットの「北」辺と「東」辺にかんして、つぎのような結論を導くことができる。(一) もっとも長い「北」辺は八七〇ニンダンにも達し、一〇〇ニンダン以下の「北」辺はほとんどみられない。いっぽう「東」辺は長くて一〇〇ニンダン、短いばあいは約一三ニンダンであった。(二)「東」辺とその対辺は、しばしば長さがくいちがっている。(三)「北」辺は一〇(ニンダン)の倍数で表現されるが、「東」辺はしばしばニンダンの下位単位まで用いて示される。「一イクⅡ一〇〇平方ニンダン、一ニンダンⅡ六メートル」。

直営ユニットの「東」辺は、ユニット中心点からみ

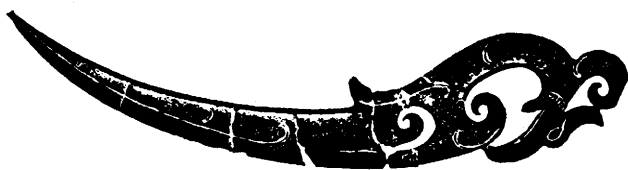
て北東方向に位置し、また「北」辺は北東から南西に向かっていたのではないか。ギルスの耕地は、北西から南東に走る大運河の西側に存在していたからである。そして、大運河から分岐した第一次灌漑水路がユニットの「東」辺に沿って、また第二次灌漑水路は「北」辺およびその対辺に沿っていたのであろう。つまり「東」辺の長さとは、二本の第二次灌漑水路間の距離でもあった。さらに「東」辺に平行に、一〇ニンダンごとに堤／＼バンドが、そしておそらくその側面に第三次小水路が作られ、これが「北」辺に平行に走る播種条間の溝に水を供給していたであらう。

一大英博物館テキストでは、計五二の直営地ユニット、およびユニットの耕作者(エンガル)五二名への割当地が測量されているが、「円形泥章」とはちがつて長辺、短辺の語が用いられていた。直営ユニット面積は一〇九・五イクと定められ、長辺は四七五—六九〇ニンダンであった。また各ユニットの長辺が、少しづつ長くあるいは短くなっているから、ユニットは長辺を接して並列していたにちがいない。いっぽうエンガル割当地の長辺は七〇〇ニンダン前後、短辺は一・五ニンダンをわずかに越える程度であった。本来は直営地として経営されるべきユニットの短辺がさらに等間隔に分割されて、極端に細長いエンガル割当地条が

多数設定されたのである。

他の大英博物館テキストでは、労働者たちへ割り当てられた地片群が測量されている。割当地長辺は直営ユニットのそれよりはるかに短く、約一〇〇—三〇〇ニンダンであつた、そしてここでも、地片群が長辺を共有して並列していたことを想定できる。

シュメール粘土板記録からは、異様に細長い耕地ユニットや地片が並列していたありさまを、かなり具体的に復元できる。本講演は、そのような復元作業の紹介をも兼ねた。



集報 (一九九一年一月より一九九一年二月まで)

おくりもの

。柳田聖山名誉教授は、紫綬褒章を授章
(四月二十九日)

。藤枝 晃名誉教授は、ハンガリー国アレクサンダー・チョマ・ド・ケレス協会から名誉会員に任命された。(四月二十九日)

。藪内 清名誉教授は、永年教育委員会を努めたことに対して京都市教育功労者に
(十一月二日)

。梅棹忠夫名誉所員は、文化功労者に(一月五日)

訃報

。吉田光邦名誉教授(七〇才)は、七月三〇日逝去、正四位、勲二等瑞宝章がおくられた。

人のうごき

。三浦秀一助手(東方部)は、東北大学文学部講師に昇任(三月一日付)

。小林敦子助手(東方部)は、辞任(三月一日付)の上、早稲田大学教育学部講師に就任

。吉川忠夫教授(東方部)は、当研究所所長、文献センター長に併任(任期四月一日～一九九三年三月三十一日)

。井上 進助手(東方部)は、三重大学助教授に昇任(四月一日付)

。平田由美助手(日本部)は、大阪外国語大学助教授に昇任(四月一日付)

。奥村 弘助手(日本部)は、神戸大学文学部助教授に昇任(四月一日付)

。荒牧典俊教授(東方部)は、大阪大学文学部教授より配置換(四月一日付)

。小野和子教授(東方部)は、三重大学人文学部教授より配置換(四月一日付)

。山田慶児国際日本文化研究センター教授

は、併任教授(西洋部)。(比較文化部門、四月一日～一九九二年三月三十一日)

。岸本美緒東京大学助教授は、併任助教授(東方部)。(比較文化部門、四月一日～一九九二年三月三十一日)

。水野直樹氏を助教授(日本部)に採用(四月一日付)

。落合弘樹氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)

。齋藤希史氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)

。安富 歩氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)

。岩熊幸男助手(西洋部)は、講師に昇任(五月一日付)

。横手 裕氏を助手(東方部)に採用(九月一日付)

。河野道房助手(東方部)は、辞任(十一月三〇日付)の上、大阪府立大学総合科学部講師に就任

。谷井陽子氏を助手(東方部)に採用(二月一日付)

。山本有造教授(日本部)は、一月四日伊丹発、台湾に於いて、日本の多民族国家体験とその歴史的意義に関する資料調査

を行い、一月一〇日帰国。

。山室信一助教授（日本部）は、一月四日伊丹発、台湾に於いて、近代東アジア世界における社会思想の循環に関する資料調査および研究交流を行い、一月一〇日帰国。

。高田時雄助教授（東方部）は、三月一三日伊丹発、パリ第七大学において敦煌資料による中国語史の研究及びライデン大学他において資料蒐集を行い、六月一七日帰国。

。山本有造教授（日本部）は、五月三日伊丹発、台湾に於いて開催の日中文化差異討論会に出席及び研究資料蒐集を行い、五月八日帰国。

。富永茂樹助教授（西洋部）は、文部省在外研究員旅費により、六月一七日成田発、フランス・応用認識論研究センターにおいて群衆行動と集合意識の生成の研究に関する実地調査及びスタンフォード大学、ケベック大学において資料蒐集を行い、一九九二年四月一六日帰国の予定。

。前川和也教授（西洋部）は、七月六日伊丹発、大英博物館においてシュメール楔形文書の研究及びフランス学士院におい

て研究打合せを行い、八月三〇日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、七月七日伊丹発、インド・スリランカにおいて上座部仏教圏における宗教と社会に関する研究・調査を行い、八月二六日帰国。

。光永雅明助手（西洋部）は、七月九日伊丹発、大英図書館、シェフィールド大学等においてイギリス実証主義の比較的研究に関する研究資料蒐集を行い、八月二三日帰国。

。富谷 至助教授・辻 正博助手（東方部）は、七月二七日伊丹発、中華人民共和国・蘭州・文物考古研究所において開催の中国漢牘国際学術討論会出席及び敦煌周辺遺跡群他にて研究資料蒐集を行い、八月九日帰国。

。水野直樹助教授（日本部）は、七月一二日伊丹発、カリフォルニア大学、ソウル大学等に於いて近代朝鮮の政治と社会に関する研究調査及び資料蒐集を行い、八月八日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、七月一八日成田発、大英博物館、マンチェスター大学、イタリア、ギリシャ、インドに於い

て象徴としての家畜—その文化人類学的研究に関する資料蒐集、実地調査及び研究打合せを行い、九月一九日帰国。

。小野和子教授（東方部）は、八月一六日伊丹発、復旦大学に於いて明史国際学術討論会参加及び研究資料蒐集を行い、八月二六日帰国。

。安富 歩助手（日本部）は、八月一六日伊丹発、タイ王国に於いて大東亜共栄圏下のタイ王国経済史に関する研究資料蒐集を行い帰国。

。狭間直樹教授（東方部）は、八月二八日成田発、イースト・ウエストセンターに於いて開催の辛亥革命八〇周年記念シンポジウム出席及び研究資料蒐集を行い、九月四日帰国。

。高田時雄助教授（東方部）は、九月二二日成田発、コレージュ・ド・フランスに於いて、第六回日仏コロック東洋学部参加及び研究資料蒐集を行い、一〇月五日帰国。

。梅原 郁教授（東方部）は、九月二五日伊丹発、ギメ博物館、大英博物館等に於いて旧中国法制史に関する研究資料蒐集を行い、一〇月九日帰国。

。岩熊幸男講師（西洋部）は、一〇月一日伊丹発、ウィスコンシン大学に於いて開催されたシンポジウム中世唯名論の起源と意味に出席・発表し、連合王国、スペインにて研究資料蒐集を行い、一〇月一日帰国。

。曾布川寛助教授（東方面）は、一〇月一日伊丹発、北京大学、故宫博物館、雲岡石窟他に於いて、中国美術に関する実地調査及び研究資料蒐集を行い、一〇月一日帰国。

。勝村哲也助教授（東方面）は、一〇月一日伊丹発、北京市に於いて開催の中国中文信息学会漢字編碼專業委員會國際學術討論会に出席して、一〇月二五日帰国。

。森 時彦助教授（東方面）は、一〇月一日伊丹発、國際研究集会派遣旅費により、武漢市に於いて開催の辛亥革命と近代中国國際學術討論会に参加して、一〇月二一日帰国。

。石川禎浩助手（東方面）は、一〇月一日伊丹発、武漢市において開催の辛亥革命と近代中国國際學術討論会に参加、中国社会科学院にて研究資料蒐集を行い、一〇月二四日帰国。

。田中 淡助教授（東方面）は、一〇月一日成田発、ハイデルベルグ大学芸術史研究所に於いて中国庭園史に関するセミナー出席及び研究資料蒐集を行い、一九九二年三月一日帰国予定。

。横山俊夫助教授（日本部）は、一〇月二〇日伊丹発、ヴィクトリア・アルバート博物館等において、ジャパン・フェスティバル1991の調査及び研究資料蒐集を行い、一〇月二八日帰国。

。佐々木博光助手（西洋部）は、一〇月二八日伊丹発、ドイツ連邦共和国、ゲオルク・エッカート國際教科書研究所に於いて近代ドイツの自己認識・他者認識に関する研究資料蒐集を行い、一〇月一九日帰国。

。齋藤希史助手（日本部）は、一二月二〇日伊丹発、復旦大学、北京大学等に於いて中国清末翻譯小説に関する研究資料蒐集を行い、一二月三一日帰国。

外国人研究員

。George Elison Saul

インディアナ大学東アジア言語文化学

部教授

一七世紀日蘭交渉史の研究（日本学客員部門）

受入教官 横山助教授

期間 二月一二日～

一九九二年一月三一日

。Yves = Marie Allieux

ストラスブル第二大学助教授

日本におけるフランス近代詩の移入と受容に関する研究（比較社会客員部門）

受入教官 宇佐美助教授

期間 五月二〇日～一〇月一九日

。安 志敏

中国社会科学院考古研究所名誉研究員

中国考古学の研究（比較社会客員部門）

受入教官 桑山教授

期間 一二月一日～

一九九二年五月三一日

招へい外国人学者

。呉 鎮坤 国立全北大学教授

韓日両国における近代西洋科学受容の比較研究

受入教官 横山助教授

期 間 一九九〇年二月二七日

一九九一年二月一九日

。 Benjamin Elman A. カリフォルニア大
学教授

中国の一五世紀から一九世紀に至る教
育と科学の展開

受入教官 狭間教授

期 間 二月一五日～五月三一日

。 Marco Ceresa ナポリ東洋大学研究員

中国と日本の茶栽培と喫茶文化

受入教官 礪波教授

期 間 三月二八日～六月二七日

。 Gudrun Buhemann

インドにおける密教儀礼の研究

受入教官 荒牧教授

期 間 四月二二日

一九九二年四月一日

。 Livia Kohn ボストン大学助教授

中世中国における仏教・道教の交渉

受入教官 吉川教授

期 間 五月一日

一九九二年四月三〇日

。 朴 星来 韓国外国語大学教授

一九世紀日本における西洋科学思想の

受容に関する研究

受入教官 横山助教授

期 間 五月二二日

一九九二年二月二六日

。 李 玉珉 故宮博物院副研究員

南詔國、大理國の仏教美術研究

受入教官 曾布川助教授

期 間 八月六日

一九九二年六月三〇日

。 劉 志琴 中国社会科学院近代史研究所
研究員

明末清初の社会と文化

受入教官 小野教授

期 間 五月三〇日～六月二九日

。 Aurora Testa G. イタリア東アジア研
究所研究員

唐代鏡鑑の研究

受入教官 桑山教授

期 間 九月一五日～十一月一四日

張 福傑 社会科学編纂部副主任

明治維新期の研究

受入教官 佐々木教授

期 間 一〇月一五日

一九九二年九月三〇日

外国人研修員

。 Fabrizio Pregadio イタリア文化研究
所研究員

宋代以後の道教

「悟真篇」とその注釈

指導教官 吉川教授

期 間 一〇月一日

一九九二年三月三一日

外国人研究生

。 Daria Berg オックスフォード大学大学
院博士課程学生

醒世姻縁伝と続金瓶梅に描かれたユ一

トピア

指導教官 梅原教授

期 間 四月一日

一九九二年三月三一日

。 Franco Gatti ナポリ大学研究プロジェ

クト員

道教文学

指導教官 麦谷助教授

期 間 五月一日

一九九二年四月三〇日

文部省内地研究員

。目黒克彦 愛知教育大学教育学部助教授
清宋におけるアヘン禁止問題に関する研究

期間 九月一日 -

一九九二年二月二十九日

東洋学文献センター講習会

。一九九一年度漢籍担当職員講習会〔漢籍電算処理〕

第一日（一〇月一四日）

計算機処理入門（講演）

大型計算機センター技官 隅元栄子

データベースについて（講義）

大型計算機センター助手 川原 稔

東洋学文献類目の編纂とフォーマット

（講義） 都築澄子

東洋学文献類目の計算機処理（講義）

大型計算機センター技官 河野 典

エキスパートシステムと情報検索

（講義）

大型計算機センター助教授 大西 淳

第二日（一〇月一五日）

東洋学文献類目と漢籍目録の電算化

（講義） 勝村哲也

ワークステーションの話（講義）

数理解析研究所助教授 萩谷昌己

人文科学とデータベース（講義）

大型計算機センター教授 星野 聰

データベース検索（一）（実習）

第三日（一〇月一六日）

知識情報処理（講義）

大型計算機センター助手 石橋勇人

情報ネットワーク（講義）

大型計算機センター助教授 金沢正憲

データベース検索（二）（実習）

第四日（一〇月一七日）

UNIXと情報検索（講義）

大型計算機センター助手 安岡孝一

漢字コードの話（講義）

大型計算機センター技官 小沢義明

データベース検索（三）（実習）

第五日（一〇月一八日）

マルチメディアと言語処理（講義）

大型計算機センター助教授 久保正敏

大学間ネットワークサービス（講義）

大型計算機センター技官 桜井恒正

質疑応答

。一九九一年度漢籍担当職員講習会〔初級〕

第一日（一一月一日）

漢籍（講義）

目録法（Ⅰ）（講義）

第二日（一一月二日）

目録法（Ⅱ）（講義）

四部分類 附、集部書（講義）

第三日（一一月三日） 滋賀大助教授 井波陵一

史部書（講義）

実習（1）

第四日（一一月四日）

新学書（講義）

実習（2）

第五日（一一月五日）

経・子部書（講義）

実習（3）

講演会

。四月二日 於本館大会議室
ウィーン大学ミッテラウアー教授講演
会

ヨーロッパにおける家族発展の特性—
とくに奉公人に重点を置いて—

。六月六日 於西館会議室

パリソルボンヌ大学教授ビュール・

ブリュネル氏を開むセミナー

ランボアの詩的道程—その五つの本質

的企画—

。一月一日 於分館会議室

劉揆一研究のいくつかの問題

湖南師範大学副教授 饒 懷民

辛亥革命研究最近の出版動態紹介

華中師範大学教授 劉 望齡

お客さま

二月 八日 遼寧社会科学院第一副院長

三月 一日 杭州大学長

科学研究処長

日本研究中心処長

教務処長

三月一四日 中国共産党中央党校代表团

中央党校副校長

マルクス主義哲学原理教研室

世界経済教研室

国際政治教研室

外事弁公室

三月二九日 北京大学哲学系教授

中国人民大学教授

四月 三日 中国社会科学院近代史研究所研究員

五月一二日 山西大学歴史系教授

五月二三日 淡江大学文学学院院长

六月二五日 ソウル大学人文大学校東洋史学科教授

朱 世良

七月一七日 フランス国立社会科学研究院教授

沈 善洪

八月 九日 貴州省社会科学院経済研究所副研究員 林 国忠

李 寿福

王 勇

九月二五日 中国社会科学院近代史研究所研究員 丁 守和

陸 堅

一〇月 五日 ミラノ大学政経学部長

アルベルト・マルティネッリ

邢 貴思

一〇月二九日 中国社会科学院歴史研究所副研究員 周 紹泉

龐 元正

一〇月二九日 台湾師範大学歴史学系教授 林 麗月

孫 仲涛

一〇月三〇日 ジレジア大学文学部講師兼教育映画監督

徐 英

Stanislaw Janicki

郝 時晋

一 月 一日 貴州師範大学教授 吳 雁南

陳 来

華中師範大学教授 劉 望齡

張 立文

湖南師範大学副教授 饒 懷民

從 翰香

一 月 五日 人民大学檔案系教授 韋 慶遠

喬 志強

一 月 二日 復旦大学歴史系教授 樊 樹志

龔 鵬程

一 月 二日 中国社会科学院近代史研究所研究員 楊 天石

吳 金成

一 月 二日 ロンドン大学名誉教授 Stuart R. Schram

十一月二十五日 中国社会科学院日本研究所室長 周季華

同 蘇聯東歐研究所科研処長 楊家榮

中国現代國際關係研究所副研究員 劉江永

十一月三〇日 厦門大學哲學系教授 高令印

十二月四日 ソ連科學アカデミー極東研究所

J. V. Chudodzeyev

十一月二十五日 中国社会科学院近代史研究所『近代史研究』

主編

夏良才



アジア主義をめぐつて

——近代日本のアジア認識班——

古 屋 哲 夫

近代日本のアジア主義がどんなものであったかを明らかにすることは、この研究班の一つの目標であったが、なかなか一筋縄でゆく問題ではなかった。

確かに戦後のアジア主義研究の蓄積は、辞典などにも「アジア主義」の項目を登場させるという成果をもたらしたが（例えば吉川弘文館『国史大辞典』、平凡社『大百科辞典』など、後者は「アジア主義」「大アジア主義」を別項目として立てている）、これらの研究はいずれも、アジア主義に一定の定義を与え、そうした定義のもとに、思想史のなかから、アジア主義を構成するであろう諸要素をとり出してくるという作業を基礎においていた。この方法は、アジア主義を広く、その周辺の傾向までを含めて問題とするには適していたが、しかし、アジア主義が何時どのような情況のなかで自覚的に主張されるようになったかという角度から追ろうとする場合には不便であった。

従って、日本人が自ら「アジア主義」という用語を用いるようになるのは何時の頃からであったかという

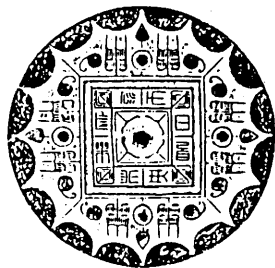
点からして改めて調べ直さなくてはならなかった。その結果——網羅的に調べ上げる余裕はなかったが大体の見当で言えば——「アジア主義」という用語は明治期には殆んど見られず、はっきりとした形で登場してくるのは一九一六年（大正五）頃からであることがわかってきた。それは第一次大戦のさなかであり、すでに日本軍が山東半島や南洋諸島のドイツ軍を駆逐し終っている時期であった。

こうした時点で「アジア主義」が唱えられ始めたということは、それまでの西洋文明対東洋文明というのとは違った形で、地域としてのアジアがイメージされる条件が出来てきたということを意味していたに違いない。そのイメージは単純化して言えば、諸列強の戦場としてのヨーロッパ、日本の力によって平和が維持されているアジア、独自の地域としてのアメリカという三分法で世界を捉えたものであり、諸列強が戦争のためにアジアをかえりみるとまがないという条件に依拠する日本人の新しい夢であったとも言えよう。

同時にそれは、その「アジア主義」が「アジア・モンロー主義」と同義と意識されることが多かったことにもあらわれているように、モンロー主義による自律というイメージの一つの範例とするものであり、それによって、ヨーロッパ戦線への出兵を拒否しようとい

う姿勢を基礎づける役割りをも果していた。
従って戦後、諸列強がアジアに復帰し、中国、朝鮮
などで日本に抵抗する民族運動が拡大するに従って、
「アジア主義」もまた、急速に論壇の表面から後退し
ていったように思われる。

しかしこの第一次大戦のさなかに描かれたアジア主
義の夢は、その後も消え去ることなく、その夢を阻げ
る諸勢力と対決するという方向に収斂しながら、次の
戦争への道を準備することになるのであった。



石窟資料とまごま

——「六朝美術の研究」班——

曾 布 川 寛

京都の有鄰館でふだん見慣れている天龍山石窟將來
の天王像の正体を初めて知った時には、まさかと思っ
た。この左右一対の天王像は、確かに山西省太原の天
龍山石窟にあったものであるが、頭と胴体は全然別の
ものが繋ぎ合わされていた。胴体はともに第十窟（北
齊）の前壁東西のものであるにもかかわらず、頭部は
右側像は同じ窟の外壁西側の力士像のものであり、左
側像は何と第八窟（隋）の外の東壁の力士像のもので
あった。このように本来別のものを一具にする例は、
比較的細工のしやすい金銅像ならば間々みられる。例
えば昨年暮れに泉屋博古館で見学した金銅佛立像は、
台座の銘から唐の天寶三年（七四四）のものとして
きたが、実は佛像本体と台座は別物であることが最近
判明し、佛像の方はかねがね思っていたように統一新
羅の可能性が出てきた。しかしこのようなことは石質
が問題になる石窟資料では珍しいケースである。天龍
山は戦前に荒らされて、現在頭部を有する佛像が一体
も残っていないという有様であるが、この天王像も数

奇な運命を辿ったものである。

また欠けた部分を新しく補ったものもある。ニューヨークのメトロポリタン美術館の巨大な皇帝礼佛図浮彫は、もともと洛陽の龍門石窟賓陽中洞（北魏）の前壁にあったものである。一見状態が良いようにみえるが、班員の指摘によって、この浮彫の人物頭部を除いた部分が殆ど後補であることを知った。これには確かな証拠があり、削り取る際に碎けた残りの断片の拓本写真が文革前の「文物参考資料」に掲載されていた。石窟資料といえども、正確なイメージを作るには余程の注意が必要である。

さて、以上の二件の資料は石窟にもあった位置が判明しているケースであるが、この位置を突き止めるのもなかなか困難が伴う。ボストン美術館には龍門石窟將來という天王像一体があり、様式からみて八世紀末のものである。大正年間に編纂された『支那佛教史蹟』にこの天王像が隣の菩薩像とともに石窟内に写っているのをたまたまみつけ、龍門東山の石窟のものであることがわかったが、今度はこの石窟が東山のどの石窟なのか依然として不明であった。ところが近年刊行された中国石窟シリーズの『龍門石窟』には隣の菩薩像が二蓮華洞南洞のものとして大きく掲載されており、天王像のものと位置が初めて突き止められた。

昨年、龍門石窟を訪れた際にこの未公開窟を案内してもらい、削られた跡を実見して漸く確認を終えた次第である。

いま一つ拓本も重要な石窟資料である。最近学内から大量に出てきた龍門石窟造像記拓本の中に「皇甫度」という名前をみつけた。皇甫度は北魏の孝昌三年（五二七）に皇甫公窟（石窟寺洞）という華麗な石窟を開窟した当代の大貴族である。この造像記が龍門のどの窟のどの龕のものなのか、また北魏の造像活動の上でどんな意義を有するのか、全て今後の課題である。



『儀礼的暴力の研究』班

田 中 雅 一

はやいものでこの研究会が発足してからすでに二年目が終り、発表の数も三〇に近づこうとしている。このあいだに湾岸戦争が勃発し、各地で国家の分裂と再編成をめぐる抗争がますます盛んになってきた。また各地の民族抗争も衰える兆しがない。こうした国家規模、世界規模での暴力の行使とその犠牲者たちの現実を見せつけられると、暴力がますます重要なキータームとなるであろうことを実感する。

儀礼的暴力という言葉には二つの意味合いが含まれている。ひとつは、儀礼行為の中で生じるような暴力を意味する。その典型は供犠である。また成人儀礼やその他のイニシエーションでの身体加工や試練なども含まれる。もうひとつの意味は暴力の発現のあり方に認められる形式性を儀礼としてとらえる見方である。儀礼的という形容詞をつけることで突発的なものや一回的なものを排除し、より文化的刻印の強いものに焦点を当てようと考えた。暴力現象を通文化的にとらえ、新たな視点から儀礼研究を推し進める一方で、暴力の

あり方、その意味や機能を文化的特性を考慮して考えてみようというのが本研究のおおまかなガイドラインであった。

いままでの発表を振り返ると、儀礼についての報告は案外少ない。発表者の関心は儀礼の中の暴力よりも暴力の文化的特性にあるようである。その例として、アフリカの邪術信仰とそれに密接に関係する暴力的な抗争や、やはりアフリカの部族紛争と社会組織との結びつきについての研究発表などをあげることができる。オリエンタリズム論の影響を受けて、異文化とくにアフリカや中近東についての西欧人の生み出す言説を暴力的なものとしてとらえる発表もあった。こうした視点は暴力のメタ次元での研究ともいえるもので、西欧思想における暴力論の発表とともに今後の展開が期待できる。

最後に特筆すべきことは、オランダの人類学者シモン・シモンズ博士によるアフリカの王殺しの慣習とデリー大学のヴィーナ・ダース教授による北インドの血讐と殉教の発表がなされたことである。来年度も数人の外国人ゲストスピーカーの参加を予定している。通文化的、学際的な暴力研究を推進するためにも海外の研究者との交流が必要と考える。

旅

台湾インテレクチュアルズと 日本語

山 本 有 造

今年は思いがけず二度の台湾行となった。一度は一月、親しい友人と組んだ資料調査ツアー、二度目は五月、国立台湾大学日本総合研究センター創立委員会主催「中日文化差異討論会」への出席であった。一方はYMCAに宿をとり、大学図書館と古本屋をかけまわるゴキブリ旅行、他方は円山飯店を宿舎に、さし廻しの自動車で晚餐会に招かれる殿様旅行、両者の落差も良い思い出となった。

二回の旅行で何が一番印象深かったか。一言でいえば台湾における親日・反日感情の諸相、とくに台湾インテレクチュアルズのそれということになるか。戦前東大出身の台湾大学名誉教授に肩をだかれて、台湾の経済発展は日本統治の賜にはかならないと繰り返し返えされるのも



居心地が悪いが、思わぬ言葉の行きちがいから、東大留学から帰ったばかりの中央研究院近代史研究所の若手研究員から日本の侵略を詰問されるのもやはり愉快とはいえない。

しかし、一番心に残ったのは、台北弁護士会長・R氏の次の一言であった。「私達はまず日本語で教育をうけ、つづいて北京語でもう一度勉強しなおさなければならなかった。これは大変だったネ。」五十五才以上の台湾人インテレチュアルズは、台湾語と日本語と普通話（北京語）のトリリンガルであるのが一般といつてよからう。そして私の印象によれば、五十五才以上のインテレチュアルズの学問的公用語として日本語の占める位置は、あるいは意外に高いのではあるまいか。日本人を交えた国際会議だから日本語を公用語としたというのはそれとして、場合によっては台湾人同士でも日本語で話すのが便利な側面があるのかもしれない、というのが私のひそかな推測であった。

もちろん、三十才代以下の若者にとって日本語は明らかな外国語である。うまい人もいるが全く関心のない人もいる。林本源家に連り、東北大学を卒業し、小咄や落語のひとつも話そうというR老教授が、われわれのエクスカージョンにつきそったピチピチ・ギャルに日本語と台湾語の勉強を説教して鼻であしらわれていたのは、象

徴的であった。

外国語としての中国語と外国語としての日本語で日台交流が行われなければならない日も近からう。台湾が一度日本から遠い国になることが、日台交流の「正常化」の前提かもしれないとひそかに思ったことであつた。



ウィーン雑感

船山 徹

九十年十月から昨年八月まで僕はウィーンで暮らした。出発直前こそ発送したSAL便の書籍をオーストリア行船便」とされてしまいあわてて神戸港で取り戻したりと冷汗をかいたものの、滞在中は東ヨーロッパ激動の年であつたにもかかわらず、概して平穏な日々であつた。インド仏教の一論書の訳注作成のために通つた研究室ではなぜか昼食をとらないという奇妙な「伝統」があり、時間が止まっているかのようだ。曜日を一度も間違わずにすんだのも土日祭日は営業しないスーパ―と足繁く通つたコンサートのお陰かもしれない。後者については僕だけの「仏教論理学の本拠地ウィーン」ではなく、いわずと知れた「音楽の都」としての甘美な記憶が今もよみがえる。折しもモーツァルト没後二百年、彼の地で聴いた演奏の数々は僕の宝物であるが、とりわけ一つのウィーンフィル演奏会が忘れられそうにない。というのも、それが一種独特の雰囲気をもつ Abonnementkonzert と呼ばれるコンサートであつて、これに僕のマヌケな体験



ウィーンの大道芸人（ケルトナー通り）

が重なるからである。ウィーンフィルの定期演奏会是一般音楽愛好家用のものと会員専用に分かれる。ふつう若者や外国人が入手するのは前者のチケットであるが、そのとき僕はたまたま一枚だけ残っていた後者のチケットを入手した。初めてのウィーンフィルであった。実は後で知ったのだが、Abonnementkonzertは専ら地位も名誉もある名士たちのためのサロンなのである。同じ曲目でありながら一般用のはプログラム冊子も異なるし、聴衆の大半は落ち着いた上流の夫婦、高齢の方々も少なくない。休憩時間には飲み物を片手に知人と挨拶を交わし（一人で行くとこの時間の何と長く感じられることか！）、拍手もごく控えめなもの。僕のようなことがわしい風体のものはいない。ひとことで言って、場違い。終了後、感激を反芻しながら、地下鉄に乗らず歩いて帰ろうかと思いつく。そして道すがら、チケット購入の際の事務所の女性とのやりとりをハタと思い出し、赤面する。「Abonnementkonzertの会員になりたいのだが……」「会員にはなれません。ただしとても長い時間待っていたかなければなりません」。——その曲目は二日後に録音され、CDとなっていま手元にある。

ロンドンの「クライヴ・ジェイムズ・ショウ」

光 永 雅 明

ロンドンに到着した夜、私はキングズ・クロスのホテルの部屋で、ぼんやりテレビを眺めていた。長旅で疲れた身体をベッドに休めて、時おりチャンネルを変えてゆく。だが、次の瞬間、私はあつと驚いた。

画面に小林克也が映ったのである。

DJにして歌手、俳優、コメディアンでもあり、英語が達者な小林克也。その彼が、テレビに出ているのだ。やがてそれは、日本のテレビ番組をそのまま放映していることに気づいた。彼は、若い女性の芸能人を相手に、得意の英語を使って、「英会話学校における光景」という一人芝居をしている。そのパロディがあまりに秀逸なため、彼女は笑いすぎて悶死寸前、という状況であった。小林克也の番組を見せたこのイギリスのプログラムは、案の定、「クライヴ・ジェイムズ・ショウ」であった。これは一九八〇年代を通じて放映された民放の人気番組で（その夜は再放送）、外国のテレビ番組を紹介しては、

司会のクライヴ・ジェームズがウィットにとんだコメントを加える、というものである。中でも人気が高いのは、日本のCMやテレビ番組である。あるいは、やや大げさに言えば、八〇年代に大衆レベルでの日本イメージを決定づけたのは、このショウで紹介される日本のテレビ番組だったのではなからうか。

もちろん、そのイメージは、良いものばかりではない。たとえば、同ショウは、かつてのフジテレビの番組「ザ・ガマン」を紹介した。しかも、この国辱番組を、毎週少しずつ、五年間にわたって放映して下さったのである。こんなものを毎回見せつけられては、日本人は残虐だというステロタイプなイメージを抱いても不思議ではあるまい。

だがそれでも、小林克也の熱演や、Tummyであるとして好評な日本のCMは、それなりに日本理解を進めたと言っていいただろう。何よりもそれは、日本人もまた、イギリス人が理解可能な「笑い」の感覚を持っていることを、実例で示した。そして、これは下らない末梢的なことに見えて、案外そうではないのではないか。何しろ、世論調査によれば、イギリス人がもつ日本人のマイナスイメージで最大のものは、今日なお、「ユーモア感覚の欠如」なのだから。



ロンドン市街

書いたもの一覧 一九九一年一月—一九九一年二月（五十音順） ◎は単行本

飛鳥井 雅 道

◎猪名川町史3・近現代（編）

兵庫県猪名川町 一月

近代の光と影 村井康彦編『京都・大枝の歴史と文化』

思文閣出版 三月

◎アメリカのサムライ（訳・ノートヘルファー原著）

法政大学出版局 三月

伝統と革新 京都市編『史料京都の歴史1 概説』

平凡社 三月

近代作家と散文精神 内藤他編『東西文学の世界』

朝日出版社 一月

荒井 健

「囲城」周辺（その三）—「学歴産業」「悪口学校」—

颯風 二五号 二月

「囲城」周辺（その四）—「酒中趣」— 颯風 二六号 二月

新井 晋 司

書評・斉藤国治『古天文学の道』

「科学史研究」第Ⅱ期・第三〇巻 岩波書店 一九九一年

荒 牧 典 俊

The Fundamental Truth of Buddhism: *Pratyasamuppada* in
Malayana Buddhism, *Machikanyama-ronso*, No. 25 十一月
国際シンポジウム『仏教と自然』のproceeding (Co-ordinator
として発言) 十二月

井 狩 彌 介

「ヒンドゥー王権論再考（田中雅一）へのコメント」

松原正毅編『王権の位相』 弘文堂 二月

サンスクリット文献とコンピュータ 人文 第三七号 三月

The Development of Mantras in the Agnicayana Ritual (1)

—On the treatment of *haura* mantras, *Zinbun*, No. 24.

三月

石川 禎 浩

書評・野村浩一著『近代中国の思想世界』 週刊読書人 二月

南京政府時期の技術官僚の形成と発展 史林 七四巻二号 三月

書評・中村哲夫著『移情閣遺聞』

神戸学院大学人文学部年報 一号 四月

李大釗のマルクス主義受容

思想 八〇三号 五月

解説・楊天石「中山艦事件の謎」

東亜 二二八七号・二二八八号 五・六月

稲葉 稜

書評・Ann K. S. Lambton 著 *Continuity and Change in Medieval Persia* 東洋史研究 五〇巻二号 九月

岩熊 幸男

Two More *Insimbia* Texts: An Edition, *Zinbun*, No. 24. 三月

宇佐美 齊

ボードレールの日本上陸 鳩よ! 一月

フローラへの供物 新潮 二月

Introduction aux *Soleils Couchants*, *Zinbun* No. 24. 三月

◎フランス・ロマン主義と現代(編著) 京都大学人文科学研究所 研究報告 筑摩書房 三月

書評・中村真一郎著「暗泉閑話」 産経新聞 四月

アルチュール・ランボー百年忌に寄せて 産経新聞 七月

書評・M・トゥルニエ著「メテオール(気象)」 産経新聞 八月

詩と批評の連携―平出隆論― 現代文学 八月

書評・D・デザンティ著「新しい女」 週刊読書人 九月

書評・清岡卓行著「萩原朔太郎「猫町」私論」 産経新聞 一〇月

◎編訳「素顔のランボー」(ドラエー、イザンバール、マチルド、イザベル著、筑摩叢書) 筑摩書房 一一月

梅原 郁

六千キロの長江を下る(朝日百科・世界の歴史別冊 旅の世界史) 朝日新聞社 五月

共同研究の到達点を考える―中国史の立場から― イスラムの都市制 第三書房 九月

紹介・胡道静著 渡部武訳注「中国古代農業博物誌考」 農業の技術一四 一一月

一三世紀の軍事力―南宋軍―「チンギスハーン」下巻 学研 一二月

大浦 康介

「文学論」序 文学 二巻一号 一月

自然から想像力へ 宇佐美斉編「フランス・ロマン主義と現代」 筑摩書房 三月

Narrateur e(s)t personnage ―dans les marges d'une étude sur le roman journal français―, *Zinbun*, No. 24. 三月

構造分析、テキスト／コンテキスト 国文学 三六巻七号 六月

日記と小説のあいだ―「鍵」をめぐる― 文学 二巻三号 七月

『讃歌』から 国文学 三六巻一四号 一二月

落合 弘樹

士族授産金の府県別貸与額について 中央史学 一四号 三月
明治前期の復祿問題と廢祿者授産 日本歴史 五二〇号 九月

小野 和子

傳增湘旧蔵「黄梨洲先生留書」について
河内良弘編『清朝治下の民族問題と國際關係』 三月

桑山 正進

The Buddha's Bowl in Gandhara and Relevant Problems, in
South Asian Archaeology 1987, (ed.) Maurizio Taddei, Part 2,
Roma, 1990. 四月

The Hephthalites in Tokharistan and Northwest India, in
Zinbun, Annals of the Institute for Research in Humanities,
Kyoto University, No. 24. 四月

小南 一郎

王逸「楚辞章句」をめぐる——漢代章句の学の側面——
東方学報 京都六三冊 三月

壺形の宇宙

北京師範大学学報(社会科学) 一九九二年二期 三月
西王母と七夕伝承 平凡社 六月

書評・小林正美『六朝道教史の研究』 創文社 一〇月

齋藤 希史

書評・David R. Knechtges, *Wen xuan* (共著)
中国文学報 四四冊 一〇月

阪上 孝

孤独と狂気——アルチュセールを悼む—— 思想 一月
Révolution et tradition — une étude comparative sur la
rédaction du Code civil: France et Japon *Zinbun*, No. 24.

マルクスとフランスの謎 情況 九月
怠ける権利 創造する市民 二九号 一〇月

佐々木 克

明治維新とフランス革命 日本史研究 三四二号 二月
初期議会の貴族院と華族 人文学報 六七号 三月
京都の再生 『史料京都の歴史1 概説』 平凡社 三月
大久保利通の虚像と実像 『歴史誕生』¹⁰ 角川書店 六月
西南戦争における西郷隆盛と士族 人文学報 六八号 七月

佐々木 博光

Deutsches Ethnos in der Entstehungszeit, Zinbun, No. 25. 二月

鈴木 啓司

思惟する「熱狂」——スタール夫人における「反省」—— 宇佐美育

編『フランス・ロマン主義と現代』 筑摩書房 三月

Essai sur Josephin Péladan II—La "décadence" dans La
Décadence latine, Zimbun, No. 24. 三月

曾布川 寛

南朝帝陵の石獣と磚画 東方学報 京都六三冊 三月

橋本コレクシヨンの明末清初絵画 「中国の絵画—明末清初—」 渋谷区立松涛美術館 四月

高田 時雄

写本からみた敦煌の言語生活 しにか 二卷一号 一月

五姓を説く敦煌資料

国立民族学博物館研究報告 別冊十四号 三月

レニングラードにあるチベット文字転写法華經普門品

内陸アジア言語の研究 四号 三月

漢字の運命 月刊言語 二〇卷三号 三月

中国語圏へ 世界のことは 朝日選書436 一〇月

六百年前の雲南流寓日本僧 しにか 二卷二二号 二月

田中 淡

中国建築、庭園與鳳凰堂—天宮樓閣、神仙苑池—(一・二)

(劉托訳) 古建園林技術 總二八期・二九期

北京市新華書店 一九九〇年九月・十二月

《墨子》城守諸篇研究(宋鎮豪訳)

中国史研究 一九九一年一期 中国社会科学出版社 二月
座談・水琴窟のルーツを探して(龍居竹之介・郡司すみ・鈴木
信宏・田中直子と)

『幻の音風景 水琴窟』日本リゾートセンター 三月
◎中国古代科学史論 続篇(共編)

都市中的理想郷—明清時代の庭園— 京都大学人文科学研究所 三月

中国の住まい—四合院と南北の伝統— 文物天地 一九九一年二期 文物出版社 三月

中国建築の伝統とその優越性—東アジア建築文化の諸相— しにか 六月

中国の皇帝の宮室 国際交流 五六号 国際交流基金 七月
『邸宅佳人—住まいの文化誌—』

ミサワホーム総合文化研究所 八月

田中 雅一

ヒンドゥー王権論再考—スリランカ、ムンネーシュヴァラム寺

院縁起と祭祀組織 松原正毅編『王権の位相』 弘文堂 二月

ヒンドゥー教の神々—その「体系的記述」をめぐる— 谷泰編
『文化を読む—フィールドとテキストのあいだ—』

人文書院 二月

パラダイムとしての人類学理論 米山俊直、谷泰編『文化人類
学を学ぶ人のために』 世界思想社 二月

まつりとまつりごと—宗教と権力 米山俊直・谷泰編『文化人

類学を学ぶ人のために」

世界思想社 二月

民族誌を読む 米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』

こ』

世界思想社 二月

解説『高地ビルマの政治体系』リーチ 米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』

世界思想社 二月

For a Sociology of Hinduism—A Critical View of Holism, Zinbun, No. 24.

三月

討論・歴史の中の家族 (JUSTITIA ユスティティア) 四月

「女性の時代」の女神研究

産経新聞夕刊 六月

宗教と社会 岡田重精編『宗教学概説』 杉山書店 五月

多彩な生愛・美・生命 (いのち) 第二回大阪・アジア・文化フォーラム案内 九月

影絵人形 栗田靖之・長野泰彦・永ノ尾信悟・南真木人編『ピンドウー世界の神と人』

関西テレビ放送 九月

マリナ・ビーチの漁民たち 坂田貞二・内藤雅雄・白田雅之・高橋孝信編『都市の顔・インドの旅』

春秋社 一〇月

民族学からみた女性 (インタビュー) 月刊みんぱく 第一五卷一一号 十一月

谷 泰

志向性の隠蔽と強化 谷編『文化を読む—フィールドとテクス

トのあいだ』(京大人文科学研究報告)

人文書院 二月

文化の森に近づく人のために 米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』

世界思想社 二月

Mode analysis of the dietary narratives in the Pentateuch, Zinbun, No. 24.

家畜管理からみたインド亜大陸 阪本寧男編『インド亜大陸の雑穀農牧文化』

三月

塚 本 明

近世前期の都市社会における脅迫と告発—張札と落文をめぐる—

近世都市社会における「サービス産業」の展開 藤井譲治・横山俊夫編『安定期社会における人生の諸相—仕事と余暇—』

京都市セミナールハウス 三月

◎山城国綴喜郡八幡正法寺文書目録 (共編) 京都府 三月
日本近世史基礎年表一—三 朝尾直弘他編『日本の近世』1、2、3 中央公論社 七月—十一月
日本近世都市史研究のあらたな展開のために 歴史評論 五〇〇号 十二月

辻 正 博

唐代貶官考 東方学报 京都六三冊 三月

一九九〇年の歴史学界—回顧と展望— 東アジア (中国—隋・唐)

史学雑誌 一〇〇編五号 五月

帛書地図

古代文化 四三卷九号 九月

磯波護

浄土教・末法思想など七二項目（世界宗教大事典）

平凡社 二月

唐代の都城と関所（東洋文庫書報22）

東洋文庫 三月

◎新版ニードム・中国の科学と文明・序篇（共訳）思索社

五月

楊聯陞教授の訃

東洋史研究 五〇卷一号 六月

桑原隲蔵（し）にか・東洋学の系譜15

大修館書店 六月

宮崎市定全集・内容見本（編著）

岩波書店 七月

◎朝日百科世界の歴史全12巻（共編著）

朝日新聞社 十一月

孫フビライ、元朝を建つ（歴史群像26）

学習研究社 十二月

怒りかつたラマ僧の横暴と紙幣乱発（同右）

同右 十二月

富永茂樹

ミュージアム遊歩道（1〜12）『淡交』一月号〜二月号

淡交社 一月〜二月

書評・饗場孝男『日本の世紀末』

週刊ポスト 三月八日号

小学館 三月

La Révolution française et la crise sacrificielle, Zinbun, No. 24.

小特集・「身体と社会」・はじめに（井上俊と共同執筆）『ソ

シオロジ』第三六卷一号 社会学研究会 六月

グレゴワールの狡智

省察 第三号 西田書店 六月

◎日本の環境教育（共著）

ぎょうせい 一〇月

道具・制度の発達と人間の対応

『CDI株仲間の提言・時代の気分』

CDI 二月

富谷至

座談会 木簡の魅力

平凡社 しにか 五月

◎本朝度量権衡攷1（校注）

平凡社 東洋文庫 八月

狭間直樹

清末民初の民族主義に関する若干の考察―「排滿」と「五族共和」をめぐる―

河内良弘編『清朝治下の民族問題と国際関係』 三月

近代中国の成立

しにか 二巻四号 四月

第一次国共合作と孫文―国民党一大大会宣言をめぐる―

東亜 二八六号 四月

朱執信対孫文民主主義的理解

近代史研究 総六三期 五月

中国人重刊『民約訳解』―再論中江兆民思想在中国的伝播

中山大学学报論叢・孫中山研究（八集） 六月

代序（巴斯蒂「清末赴欧的留学生們―福州船政局引進近代技術的前前後後」、『辛亥革命史叢刊』第八輯）

九月

藤井讓治

明治国家における位階について 人文学報 六七号 一二月

新館蔵史料「中山家文書」について

敦賀市立歴史資料館紀要 六号 三月

◎安定期社会における人生の諸相―仕事と余暇―(横山俊夫氏と共編著) 京都ゼミナルハウス 三月

木津の領主たち・水運と街道『木津町史』本文篇 三月

◎日本の近世3 支配のしくみ(編著) 中央公論社 一月

藤田隆則

音楽形式・所作形式からドラマを読む 谷泰編『文化を読む―フィールドとテキストのあいだ』 人文書院 二月

船山 徹

On *Asvayashtha* 印度学仏教学研究 三九―二 三月

古屋 哲夫

帝国議会の成立―成立過程と制度の概要

『日本議会議録・1』第一法規出版 二月
護憲運動とシーメンス事件―第二八―三二議會

『日本議会議録・2』同前 二月
金解禁・ロンドン条約・満州事変―第五七―六一議會―

『日本議会議録・3』同前 二月
翼賛体制と対米英開戦―第七六―八〇議會

『日本議会議録・3』同前 二月

前川和也

The Girsu "seed-and-fodder texts" of Sulgi 41, *Zinbun*, No. 24. 三月

The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (VII), *Acta Sumerologica* 13 (1991).

水野直樹

(民族運動史上の人物) 呉成崙 朝鮮民族運動史研究 七号 四月

◎『アリランの歌』覚書(共編) 岩波書店 五月
◎東北アジアの過去・現在・未来―統一コリアを望みつ―(共著) 金沢大学大学教育開放センター 九月

京都府の朝鮮人強制連行「朝鮮侵略と強制連行」 大阪人権歴史資料館 一〇月

光永雅明

◎ジョン・コルヴィル「ダウニング街日記(下)」(共訳) 平凡社 二月

「精神権威」と「効率」―フレデリック・ハリスンの選挙法改正論をめぐって 人文学報 六九号 一二月

麥谷邦夫

◎真話索引 京都大学人文科学研究所 三月

森 時彦

華西のマンチェスター—沙市と四川市場

東洋史研究 五〇巻一号 六月

安 富 歩

大連商人と満洲金円統一化政策 証券経済 一七六号 六月

書評・岩武照彦著『近代中国通貨統一史』

アジア経済 三三巻七号 七月

解説・Michio Morishima, Ricardo's Economics

経済評論 四〇巻一〇号 一〇月

山下 正 男

形而上学の虚妄性

人文学報 六八号 三月

山 田 慶 兒

◎中国古代科学史論統篇(田中淡との共編)

京大人文科学研究会 三月

発見された馬王堆医書『呉越の風筑紫の火』

東アジア文化交流史研究会 五月

『国際交流』五六特集「東アジア科学・技術の系譜」(監修)

七月

伝統中国の死生観と老人観

『老人精神医学雑誌』 朝日新聞社 八月

◎制作する行為としての技術

黄帝内経—中国医学の形成過程 『日本東洋医学雑誌』一〇月

古代人の夢の地平—中国占術盛衰記『イマゴ』臨時増刊号 一月

宇宙の建築と建築の宇宙『nitoba』 一月

山 室 信 一

国民国家・日本の發現—ナショナリティの立論構成をめぐる

人文学報 六七号 十二月

Le concept de public-privé, in Christian Sauter et Yoichi

Higuchi, eds. *L'État et l'individu au Japon* (Paris, Éditions

de l'École des Hautes études en sciences sociales) 一月

「満洲国」の法と政治—序説

人文学報 六八号 三月

箕作麟祥と河津祐之

政治的なるものの断層—一九九〇年代政治への一視点 法制 四一八号 五月

内山秀夫編『政治的なものの今』 三嶺書房 一〇月

山 本 有 造

日本における植民地統治思想の展開(Ⅰ)(Ⅱ)

アジア経済 三三巻一号 二月

デイスカッション—日本の経済発展に於ける「超長期的雁行形

態モデル」 浜下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工

業化一五〇〇—一九〇〇』リブポート 六月

横山 俊夫

安定社会の仕事と余暇 毎日新聞夕刊 三月一五日

歴史のなかの家族(前川和也氏らと座談会) [JUSTITIA] 2

ミネルヴァ書房 三月

京都府文化フォーラム(第五回) —文化・画一性と個性(討論主宰・編集) 京都府文化芸術室 三月

◎安定期社会における人生の諸相—仕事と余暇—(藤井讓治氏と共編) 財団法人京都ゼミナールハウス 三月

安定社会論の試み 「生活新時代の国土ビジョン検討調査報告書」(同名研究会編) 財団法人民間都市開発機構 三月

第三回関西地区大学対抗留学生日本語ディベイト・コンテスト 審査講評「留学生ウィーク90」大阪国際交流センター 四月

長岡京ガラシヤ祭Ⅱ市民祭Ⅱ実施構想報告書(討論参加) 長岡京市イベント検討委員会 五月

図版解説・吉田光邦、田中一光、瀬底恒「つくるーひと・もの・び」 マツダ株式会社 八月

災害史・災害技術史の研究体制に関する研究(野中泰二郎編・執筆分担) 京大学事務局研究協力課宛提出 八月

追悼 吉田光邦(共編) 吉田光邦先生葬送世話人会 九月

21世紀への道程(1)—集団主義と個人主義、組織と個人を考える— 第四回富士会議報告(討論参加・分科会総括) 日本アイ・ビー・エム 一〇月

諸道の時代(前篇)「ゼミ友の会だより」 45 京都府立ゼミナールハウス 一一月

「ガイジン」上田篤編・マスシティ研究会著「マスシティ—大衆文化都市としての日本」 学芸出版社 一一月

文化都市の研究(討論参加)「NIRA政策研究」四卷一—号 NIRA 一一月

英国ジャパン・フェスティバル91視察・調査報告書 国際交流基金企画室宛提出 一二月

吉川 忠夫

Scholarship in Ching-chou at the End of the Later Han Dynasty, Acta Asiatica No. 60, The Tōhō Gakkai 三月

五岳と祭祀(現代哲学の冒険—五・ゼロ・ビットの世界) 岩波書店 四月

麒麟の話 きりん 一二号 七月

書評・小林正美「六朝道教史研究」東方宗教 七八号 一一月

「中外日報」社説 二六回 一—二二月

おもしろく読んだ本

荒巻典俊

Michael Loewe, *Ways to Paradise. The Chinese Quest for Immortality*, George Allen & Unwin: London, 1979

小南一郎

岡野弘彦『折口信夫の晩年』中央公論社

藤田隆則

小林正佳『踊りと身体の回路』青弓社

安富歩

塩沢由典『市場の秩序学』筑摩書房

ブリゴジン『混沌からの秩序』みすず書房



人

文

第三八号

一九九二年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

中村印刷株式会社

非売品